

## 集落営農で短茎小ギク栽培の省力機械化体系に取り組んで

淡路市入野営農組合は、圃場整備事業を契機とした法人設立に伴い高収益作物栽培の検討を進めており、その中で短茎小ギクに取り組んできた。2020年から試作を開始し、2021、2022年には実証圃として、省力化機械体系に取り組んだ。

### 背景

淡路市の中山間地域に位置する入野集落は約半分の圃場が未整備で、2019年に後継者不足や狭小農地の荒廃等を懸念し、圃場整備を計画した。担い手となる集落営農組織は、これまでの機械共同利用だけでなく、法人化して、組織運営が可能な高収益作物の導入を検討した。その候補として、地域で古くから生産している露地小ギクに着目し、市場からの要望があり、集落営農で取り組めて機械化体系が可能な短茎小ギクの定着を目指した。

### 取組内容

機械化・省力化に関する実証に取り組んだので、以下について紹介する。①畝立て+施肥+マルチ同時施工、②半自動移植機による定植（以上2021年）、③ドローンを利用した少量散布による防除効果の確認、④一斉収穫機を用いた収穫（以上2022年）。

### 結果と考察

畝立て・施肥・マルチ同時施工を行うと10a当たりの作業時間が10.9時間となり、43%軽減できた（表）。半自動移植機による定植では同じく15.9時間となり、80%軽減できた（表）。ドローン防除は

表 短茎小ギクの各作業時間（10a 当たり）

	畝立て、施肥、 マルチ施工	定植	収穫
実証圃	10.9	15.9	5.0
慣行	19.0	80.0	8.5

確実に省力化が図られた。高濃度・少量散布の使用基準がなかったため、通常の希釈倍数・少量散布（40ℓ /10a）で行ったところ、手散布とほぼ同等の農薬付着率で、防除効果も同等であった（データ略）。一斉収穫機（写真）を利用すると、10a当たりの作業時間は慣行の8.5時間に対して5.0時間となり、収穫時間を41%短縮することができた（表）。

この2年間の取り組み結果から、畝立てから収穫まで省力化機械を使用した短茎小ギクの栽培体系が確立できた。

### 今後の方針

実証は10a規模で行ったが、本格的に栽培を始める際には1ha以上を計画している。そのため、今回の結果をもとに法人経営における機械装備や人員配置等を検討し、需要期に合わせた出荷可能な栽培技術の支援等により、法人経営の柱としての定着を目指す。

石上 佳次（北淡路農業改良普及センター）  
（問い合わせ先 電話：0799-62-0671）



写真 一斉収穫機による収穫作業

ひょうごの農林水産技術 No.224 (2024.2) ※本内容は、当センターホームページにも掲載

令和6年2月25日

兵庫県立農林水産技術総合センター (0790) 47-2408